



▲ 5年に一度奉納される油日神社の「奴振り」

甲賀市の文化財⑬

滋賀県選択無形民俗文化財
奴振り

文化・自然へのとびら

ユーモラスな歌と身ぶりで 観衆を魅了する奴振り

油日神社の古式祭（油日祭）に5年に一度奉納される祭礼「奴振り」が5月1日行われ、ユーモラスな歌と身振りで練り歩き、沿道の観衆を楽しませました。

この奴振りの由来は、扶箱奴の歌に「油日祭のはじまりは天元元年（978）4月より」と歌われるように天元元年、橋敏保卿が勅使として参向したのを機に甲賀

の上野、高野、相模、佐治、岩室の5つの地域が毎年交代して祭主を勤め、行列を出したのが始まりとされ、奴振りは室町中期ごろから始められたと伝えられています。現在この奴振りの伝統を受け継いでいるのが「上野頭」だけとなり、そのため5年に一度の奴振りとなっているのです。

本来この奴振りの行事は、頭殿がお供を付き従えて神社に参詣する頭殿行列がメインであったものが、次第に滑稽な身ぶりや道中歌を歌う奴が加わることによって、参向を見守る観衆を楽しませる祭礼へと変化してきたものと考えられています。

祭礼当日は、長持奴、扶箱奴、毛槍奴をはじめ総勢百人余りの行列が午前10時に頭殿宅を振り出し、油日神社へ参向します。そして、御輿2基、獅子2頭を先頭に御旅所をはじめ町内約10キロの道のりを巡行し、夕刻には神社へ再び振り込みが行われ、最後に頭殿宅へ振り込み、奴振りに幕が閉じられます。

この奴振りの祭礼は、中世以来の甲賀の歴史を知る上で、とても重要な祭礼行事です。相模頭の記録には、江戸中期頃まで5年毎を一度も欠かすことなく、奴を伴った盛大な頭殿の参向の様子を窺うことができます。

甲賀市教育委員会では、県選択の無形民俗文化財「奴振り」の伝統行事を長く後世に伝えるため、映像記録という形で保存伝承をはかることにしました。

今後、撮影した記録を整理し、祭礼行事にかかわる記録調査を行いながら、皆さんに見ていただくような編集作業を進めていく予定です。

今回の撮影で夜遅くまで練習に励んでいた奴役の皆さん、そして撮影に協力いただきました地域の皆さん、本当にありがとうございます。

【問い合わせ】

文化財保護課

☎ 86-8026

FAX 86-8380

めるうえで大きな資産となり、これを活かした取り組みが各地で行われています。

市史の小径

第10回

街道を歩く
その1

水口と土山の二つの宿は、隣り合いながら、それぞれはっきりとした個性を備えています。たとえば土山は草津宿とならび数少ない貴重な本陣遺構が伝えられるのをはじめ、落ち着いた町並みが風格を感じさせるとともに現代の旅人を優しく迎えてくれます。一方水口は古い町屋は少ないものの、水口岡山城の城下町遺構である「三筋町」が残り、町民主体の祭りである水口曳山祭が、今もコミュニティの核となっています。

今、街道を歩くことが中高年の間でブームです。五十三次を踏破するのは巡礼にも似た魅力があるようです。市史での調査成果を含めてその見所を紹介していきます。

都に近く東海道や東山道が通じた近江は「道の国」ともいわれます。甲賀市内でも東海道をはじめ、御代参街道など大小さまざまな街道が通じ、社会や経済、そして人々の暮らしを支えて来ました。なかでも東海道は中山道とならび近世交通の大動脈であり、甲賀市内には近江五宿のうち水口と土山の二宿を擁します。

宿場町は地域の中心としての役割を果たすと同時に、「五十三次」の一つとして宿駅制度という強固なネットワークのもとにあり、人とモノ、そして情報伝達の拠点として機能してきました。同時にその歴史的景観や、そこに育まれた街道文化は、観光や住みよいまちづくりを



▲ さあきますか（「近江名所図会」より）

【問い合わせ】 総務課市史編纂係
☎ 86-8075 FAX 86-8380